頼瑜『真俗雑記』における明恵教学の理解

研究生　小宮　俊海

要旨

頼瑜（一二二六年～一三〇四年）『真俗雑記』には、真空（一二〇四年～一二六八年）の説が「木幡義」として頻出する。それに対し、明恵（一一三七年～一二三二年）の説と思しきものが「栂尾義」として散見される。特に『菩提心論』所説「我見自心形如月輪」の解釈を手掛かりに、頼瑜の菩提心理解並びに六大縁起に対する見解を明らかにし、明恵教学をいかに受容したのかその一端を探る。

試論

まず、「我見自心形如月輪」の文は『菩提心論』から『真実摂経』に遡ることができる。また、菩提心が即ち月輪であるという解釈は『即身成仏義』に説かれる六大無礙を根拠として求めることができる。(1)

『真俗雑記』と合わせ、頼瑜の『菩提心論』に対する注釈書である『菩提心論初心鈔』、『菩提心論愚草』並びに、「栂尾義」が説かれる『顕密問答鈔』の菩提心と色形に関する記述をみると、識大に色形を認めるか否かという議論が起り、顕教、特に一乗教は一法界、一心縁起説を基に理解するのに対し、密教は多法界、六大縁起説に基づいて理解するとの見解が示される。しかし、それはあくまで隨縁の六大とされ、四重秘釈の最極ではないとする。そして識大に色形を認める場合は、『顕密問答鈔』以外の既述の著作は、覚鑁『心月輪秘釈』を用いて解釈している。(2)

頼瑜は、顕教の代表である一乗教を「一心法界縁起説」とし、「栂尾義」を用いている。また、「木幡義」と対を成し、密教の優位性を主帳する前段階に「栂尾義」を挙げている。頼瑜は、明恵教学を積極的に受容するも、その目的は、真言密教の優位性を主張するためであったのではないか。

展開

頼瑜の明恵説の受容は、『金界発恵抄』の護身法解釈にもみられ、「栂尾義」は、『即身義愚草』にも挙げられる。(3)『即身義愚草』の記述をみても六大に関するものであり、『即身義顕得鈔』の六大解釈においても『心月輪秘釈』を用いている。これは、明恵門下である高信『六大無碍義抄』の説を下敷きとしていることが指摘され、伝本からも窺える。(4)

また、六大と法界の関係については、高野山上の宝寿二門においても議論される問題である。(5)

注

(1)『菩提心論』（大正蔵三二巻、五三七頁下）、『真実摂経』（大正蔵一八巻、二〇七頁下）、『即身成仏義』（弘大全一輯、五〇八―五〇九頁）。

（2）『真俗雑記』（真言全三七巻、一八五頁下）、『菩提心論初心鈔』（新版日蔵四八巻、一一七頁下）、『菩提心論愚草』（続真全一一巻、一〇六頁上）、『顕密問答鈔』（続真全二三巻、一八頁下）、『心月輪秘釈』（興大全巻下、一〇五七―一〇五九頁）。

（3）粕谷隆宣　二〇〇五年「明恵と護身法」『豊山教学大会紀要』三三号、『即身成仏義愚草』（新義真言研究会編、二一五頁）。

（4）『即身義顕得鈔』（真言全一三、一七上）。野呂靖　二〇〇七年「順性房高信と頼瑜」『印仏研』五五巻―二号、髙橋秀城　二〇〇八年「頼瑜の夢相」『智山学報』五七輯、巻下真福寺本奥書。

（5）甲田宥吽　一九八二年「宝寿二門の中院流」『密教文化』一三九号。